

人を殺してしまう心

[聖書]創世記4章1～16節 ◆カインとアベル

さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。

アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。主はカインに言われた。

「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。主はカインに言われた。「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」カインは答えた。「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」主は言われた。「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらい者となる。」カインは主に言った。「わたしの罪は重すぎて負いきれません。今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらい者となってしまえば、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」主はカインに言われた。「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう。」主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けられた。カインは主の前を去り、エデンの東、ノド（さすらい）の地に住んだ。

[序]なぜ人が人を殺すのでしょうか

今日は川越教会の教会組織26周年を記念して礼拝を守ることにしました。そして教会の信仰告白を先程と一緒に読みました。この信仰告白は、イエス・キリストを基盤とする聖書を信仰の唯一の基準とし、聖霊の助けによって聖書を解釈していくという宣言をもって書き始められています。

私たちは、聖霊の導きを祈りつつ聖書を深く読むことによって、イエス・キリストを救い主とする信仰を正しく持つことができると告白しているのです。今日の聖書日課は創世記4章です。与えられた聖書のこの箇所から、イエス・キリストを救い主と信じる信仰を読み取って参りましょう。

去る5月2日夜にパキスタンで、国際テロリスト集団アルカイダの指導者オサマ・ビンラディンが米軍特殊部隊によって殺害されました。2001年9月11日アメリカで発生した航空機を使った4つのテロ事件で死者2993人、負傷者6291人、行方不明者24人がでました。アメリカは直ちにアルカイダを滅ぼすために、アフガン、続いてイラクで軍事行動を起こしました。イラクの独裁者サダム・フセインは5年後に逮捕処刑され、10年たった今月、ビンラディンが殺害されました。アメリカでは

事件への制裁を果たしたと、国民は沸き立ちました。しかしこの 10 年間でどれほど大勢の人が殺されたことでしょうか。そして世界はますます平和から遠のいていくと、誰しもが感じています。

どうして大切な人の命を大量に殺す戦争が、次々と起るのでしょうか。自爆テロで無差別に人が殺されていくのでしょうか。殺人・殺人のパレードで世界は滅びに向っています。どんなことがあっても人の命を貴び、人を殺さない世界を取り戻さなければなりません。それにしてもどうして、人が人を殺すという恐ろしい行為が、始まったのでしょうか。この深刻な問を抱えて聖書を読んで参りましょう。

[1]最初の殺人

聖書は、神さまが世界万物を創造された。その世界はエデンの園とも呼ばれる極めてよいものだったという信仰に立って、世界と人間の歴史と現実をみていきます。エデンの園では人間をはじめ全ての生き物が、青草と木の実を食物とし、互いの命を奪うことはありませんでした。人間が牛や豚や鳥や魚などの生き物を殺して食べることはない世界だったのです。

神さまは善悪を知る木の実だけは食べるなど命じて、人間にこの楽園を管理する責任を委ねられました。善悪の判断だけは創造主である神に聞き従うこと、そうでないと死ぬと神さまはおっしゃいました。そうです。人それぞれが善悪の判断を勝手に下せば、善悪が混乱し争いが生じます。しかし人間は「目が開け、神のように善悪を知るものとなる」という誘惑の言葉に負けて、善悪の知る木の実を食べてしまいました。

その結果、アダムとエバは楽園を失いました。そして彼らの家庭から最初の殺人事件が起こったと聖書は記します。楽園ではない社会とは、殺人が起こる社会のことで、殺人が楽園を失った世界の特徴だと聖書は語っているのです。しかも人間の一番親密な関係である家族の間で、最初の殺人事件が起こった。同じ親から生まれた兄弟という絆も、殺人を防げなかったのです。一体どうしたことでしょうか。

アダムとエバの家庭に与えられた二人の息子。兄のカインは農業を、弟のアベルは牧畜を営みました。収穫期になったので、カインは農産物を献げて礼拝しました。アベルは子羊を献げて礼拝しました。ところがアベルの献げ物は神さまに受け入れられたのに、カインの献げ物は受け入れられませんでした。カインは激しく怒って顔を伏せました。激しく怒ると体中の血がガーッと上がって頭が重くなり、自然に下を向くのだそうです。そしてカインはアベルを野原に連れ出して、殺してしまいました。

この聖書の記事を読むと、多くの人はカインが怒るのも当然だ、神のえこひいきが原因だと、神さまがよくないと思いがちです。もしも二人の献げ物が同じように受け入れられていたら、カインが激しく怒ることもなく、アベルを殺すこともなかったと言うのです。では神さまはどうしてカインの献げ物を受け入れなかったのでしょうか。

カインとアベルについては、新約聖書に6ヶ所出てきます。ヨハネ第一3:12、ヘブライ 11:4、12:24、マタイ 23:35、ルカ 11:51、ユダ 11 です。これらを読みますと新約聖書を生み出したキリスト教会は、カインとアベルの違いを「信仰をもって献げたかどうか」に見ています。ではカインには信仰がなく、アベルには信仰があったと言うことが、どこで分かるのでしょうか。

創世記 4 章 3～4 節の記事から比べてみましょう。「カインは地の実りを主のもとに献げ物として持って来た」。「アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た」。カインの献げ物はただ土の実りとあるのに、アベルの方は、羊の群れの中から肥えた初子を持って来たとあります。新改訳聖書では「アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で持って来た」と訳しています。

カインの方は、特別に吟味して献げる心がなかったのに対して、アベルの方には 最良の物を献げようとする心がありました。収穫を神さまに感謝しようとした時のこの違いに、信仰のある・なしが表れたと新約聖書は見たのでした。

ところがカインは、アベルと自分との間に神さまに対する信仰の違いがあり、それが献げ物に表れたなどということに、気付いていません。自分たち二人に対する神さまの態度の違いだけしか目に入らなかったのです。「同じように収穫感謝をしたのに、どうして自分の献げ物は受け入れられないのか。えこひいきだ！」。

彼の心に怒りが燃え上がりました。神さまはすぐに忠告なさいました。「罪がお前を取り込もうとして、戸口で待ち伏せしている。罪に支配されてはならない。罪を支配しなさい」。しかしカインは怒りを静めることができませんでした。神さまの忠告も耳に入らぬままに、弟を野原にさそい出して、殺してしまったのでした。

[2]神と向き合う大切さ

兄弟の仲は、同じ血を分け合い、同じ親の許で育ちながら、競走相手・ライバルでもあります。エサウとヤコブは双子の兄弟でしたが、ヤコブは先に生まれるエサウのかかとを掴んで生まれて来たと聖書は記しています(創世記 25:26)。ですから親はよくよく注意して、子どもを公平に扱い、えこひいきをしないようにしなければなりません。

では神さまも、カインとアベルの献げ物を同じように受け取るべきだったのでしょうか。しかしそれでは一番良い物を献げようとしたアベルと、そのようなことを全く考えないで安直に献げ物をしたカインを公平に扱ったことになりません。カインが大事な事に気付かずには過すのでは不幸です。ですから神さまはアベルの心を正しく評価し、カインの献げ物を受け取らないという形で、カインを戒めようとしたのではないのでしょうか。

ところがカインは激しく怒ったのです。しかもその怒りを神さまに向けずアベルに向けました。おかしいですね。でもここに私たちの心が、いつも人に向けられ、人を競争相手・ライバルにしてしまう現実がしっかりと現されています。自分を人と比べて優越感にひたったり、劣等感に襲われたり、幸せ気分になったり、惨めになったり——私たちの目はいつも他人に向けられ、他人に振り回される感情の行き着くところで殺人が起こったのです。

なぜ人が人を殺すようになったのか。根本は人間の欲望ではないかと誰でもが考えます。でもカインのアベル殺人は、欲望の結果ではありませんでした。これは聖書が、人間の欲望よりももっと深いところに殺人の動機を見ていることを、物語っています。それは何か。

善悪の判断を神に聞こうとせず、自分で決めて自分で処理しようとした人間の根本的誤りに殺人の動機があると見ているのです。神さまが創造された世界を楽園ではなくしてしまった人間の根本的誤りが、殺人を生み出したのです。

神さまはカインに「罪が戸口で待ち伏せしている。罪を支配しなさい。罪に支配されてはならない」とおっしゃいました。どうしたら罪を支配できるか。すぐ人に目がいき、人に振り回されてしまう自分の心を人から引き離す。そして先ず神さまとしっかり向き合うことです。そして「神さま、どうしてですか」と神さまに質問することです。

「人間の間ではえこひいきがあるけれど、神さまにはえこひいきなどない。これには何か深いわけがあるはずだ」と考え「教えて下さい」と神さまに分かるまで問い続けるのです。そうしたら次第に自分の問題点がはっきりしてきます。

繰り返して申します。エデンの園の特色は、園の中央に禁断の実を結ぶ木が据えられていることでした。「食べると必ず死ぬ」といわれる善悪の知識の木が据えられていました。「善悪の判断だけは自分勝手に下さないで神さまに聞き従う」。これがエデンの園をエデンの園としている唯一のルールだったのです。善悪の究極の基準として神さまが存在する世界——それがエデンの園だったのです。

しかしアダムとエバはその木の実を食べ、自分の目が開かれると同時に、神が見えなくなっていました。善悪の判断を問う神さまを失い、エデンの園を失いました。そして善悪を神さまに聞かなくなった二人の下で、神に聞こうとしないカインが生まれ育ちました。彼は自分の献げ方で善いと判断しました。それを受け入れない神が悪いと判断して激しく怒りました。別の判断があるなど思ってもみなかったのです。

更にカインは、自分の献げ物を受け取らない神さまに向けるべき怒りを、アベルに向けました。アベルはカインに対して何も悪いことをしていません。自分でよく考えて、神さまに対して良いと思う行動をとっただけです。ひどい八つ当たりでした。

もしもカインが「神さま、どうしてアベルの献げ物は受け取り、私の献げ物は受け取らないのですか」と問い続けたら、自分では気がつかなかった信仰の足りなさが分かり、アベルが自分よりも優れていたことが納得できたはずです。だから善悪の判断を聞いていく神さまを信じる信仰を持つことが、私たちにはどうしても欠かせません。神なき心が私たちを殺人へと向わせるのです。

[結]カインのしるし

アベルの血を飲み込んだ土からは、作物が実らなくなりました。働いても働いても収穫を得られません。もうこの土地では暮らせない。住み慣れた土地を離れて何処かに生きる地を捜さなければなりません。カインは窮地に追い込まれて、弟を殺した罪の重さ大きさと直面させられました。

神さまの声が聞えてきました。「お前は地上をさまよひ、さすらい者となる」。見ず知らずの地をさまよえば、よそ者の自分が人から殺される破目になります。「私の罪は重すぎて負いきれません」。カインは殺される恐れに怯え始めたのでした。すると神さまは、彼に出会う者が彼を襲うことがないように、カインの体にしるしを付けて下さったのでした。こうして彼は、両親の許を離れ、エデンの東、さすらいの地で生涯を送ることになりました。

イエス・キリストは十字架の上で「自分を救え」と口々にののしり嘲る人々を見て、「父よ、彼らをお赦してください。」と祈られました。一緒に十字架刑に処せられた重い犯罪人の一人が、その祈りを聞いて「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」と願いました。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」とおっしゃいました。そして「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と言って息を引き取られました。

こうして全く罪のないお方が、すべての人の罪を一身に引き受けて、贖いの死を遂げ、罪の赦しと救いの恵みもたらして下さいました。たとえどんなに大きな重い罪を犯した者でも、キリストの十字架の死で赦され、救っていただける——こうして私たちは、神さまが愛の神であるという固い信仰を与えられたのです。

そのような愛の神さまですから、カインが自分の負いきれない罪を告白した時に、赦しと救いのしるし、神の愛のしるしをカインの体に付けてくださったと読み取る——これが聖書をイエス・キリストから読んで信仰の唯一の基準とすることです。そしてそのしるしは、自分の罪を告白して救いを求める私たちにも与えられていると信じるのです。

今日私たちの体に神さまが付けて下さっているしるし——それは十字架のしるしです。ヨハネはこのように語りかけています。「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです」(ヨハネの手紙一 4:10)。

神さまは私たちにイエス・キリストの命を与えてくださいました。十字架の愛のしるしを付けられた者として、聖書を読みつつ神さまの御心を聞き取りながら、自分の命を献げ、命を与える愛の生涯を送る者になりたいものです。

完